動物物語集　一

あすか　こうじ

動物物語集 - 目次

1. みきちゃん、猫を拾う
    1. 福音は誰がために降り来たる
        1. あとがき

動物物語集　一

あすか　こうじ

目　　次

みきちゃん、猫を拾う

福音は誰がために降り来たる

あとがき

みきちゃん、猫を拾う

みきちゃんのおうちでは、お母さんがさっきから何回もとけいを見ています。もう、５時ちかいというのに、みきちゃんはかえってきません。みきちゃんは今日も、ようちえんから帰ってくるとすぐに公園にあそびにいったのでした。お母さんはすこし心配になってきました。それで、公園にみきちゃんをむかえにいこうかしら、とお母さんが思ったちょうどそのとき、玄関のベルがなったのです。

はあい、とこたえてドアをあけたお母さんはびっくり。ドアの外にはみきちゃんがたっていたのですが・・・両手でなにか黒いものをだきかかえています。それをかかえているので、みきちゃんはドアをじぶんであけられなかったのです。お母さんはおもわず大きな声をだしてしまいました。

「みきちゃん、なにをもってかえってきたの！」

じつは、みきちゃんがだいじそうにだきかかえているのは、公園でみつけたちいさな猫なのです。すっかりよごれてなんだかボロボロになっている、一匹のちっぽけな子猫なのでした。

みきちゃんはそうっとお母さんを見上げました。お母さんがとつぜん大きな声をだしたものだから、すっかりびっくりしてしまって、どうしたらいいかわからないのです。かろうじて、ほんの小さな声で「猫・・・」とひとことだけ、つぶやいたのでした。

「猫は見ればわかるわよ。どうしたの、その猫！」

「あのね、みきちゃんがね、公園で・・・」

「捨ててきなさい！」

みきちゃんはポカン、と口をあけてお母さんを見上げています。まさか、そんなふうに言われるとは思っていなかったのです。捨ててくるなんて・・・、みきちゃんには、とてもできません。お母さんはもう一度、いいました。

「捨ててきなさい！！その汚い猫！」

「だめぇ！」みきちゃんも大きな声をだしました。

「この子、おうちで飼うのぉ！この子、公園でないてたの、この子・・・」

「いけません！！うちで猫なんて飼えないの！しかもそんなきたないのら猫！すぐに捨ててきなさい！！」

みきちゃんの両目にじんわり涙があふれてきました。みるみるそれは、ちいちゃなほほを伝って流れ落ちました。ひとつ、またひとつ・・・。そしてみきちゃんは、ついにうわーーーっ、と大きな声をだして泣いてしまいました。お母さんは、小さくひとつため息をついて、みきちゃんの方にかがみこむと、こんどはやさしい声で言いました。

「みきちゃん、いい、お母さんのいうことをよく聞いて。あのね、お母さんはなにもみきちゃ

んにいじわるを言ってるんじゃないの。いい？よく聞いてね。のら猫ってすっごくきたないのよ。ばいきんでいっぱいなの。もし、びょうきとかうつったりしたらどうするの。それにだいぶよわってるみたいじゃない。さ、すぐに公園にすててらっしゃい。」

みきちゃんはそれでも泣きやみません。それに、公園にいくそぶりもみせません。みきちゃんには、みきちゃんの言い分というものがあるんです。よわりきった、きたない猫だけれど、それだからこそみきちゃんはおうちへつれてかえって助けてあげたかったのです。そのことをちゃんとお母さんにおはなしできればいいのですが、ちいさなみきちゃんはただただかなしくて、つらくて、いいたいことが言葉ではなく涙になって、あとからあとからこぼれおちてくるのです。みきちゃんがただ泣きじゃくってばかりなので、お母さんはこまってしまいました。

それがつい、こんな言葉になってしまったのです。

「もういいかげんにしなさい！！みきが捨ててこないんなら、お母さんが捨ててきます！」

お母さんは、みきちゃんから子猫をとりあげようとしました。でも、みきちゃんはクルッとうしろを向いてうずくまって、もっと大きな声をあげて泣きました。それから、お母さんがなにを言っても、へんじもしないで、ただ泣きじゃくるばかり。猫をとりあげようとしても、みきちゃんは全身の力をこめてふんばって、わたしません。お母さんも、しまいには弱りはててしまいました。そしてとうとう、こう言ったのでした。

「もう、しかたないわね。みきがそこまでいうなら、こんばんだけはうちに置いてあげます。それでお父さんがいいって言ったら、うちで飼ってもいいわ。そのかわり、お父さんがだめって言ったら、あした、公園に捨ててきましょ。」

でも、みきちゃんはだまったまま、首をふりました。また公園に捨てられたりしたら、きっとこの子は死んでしまうにちがいありません。だって、公園ではじめてこの子をみつけたとき、みきちゃんはこの子は死んでいるんだと思ったほどなのです。

みきちゃんと、おともだちのさとちゃんは、公園のブランコであそんでいました。どっちが大きくブランコをゆらせられるかきょうそうしていたら、いきおいがつきすぎてみきちゃんのくつが片一方ぬげてとんでいってしまったのです。くつは、公園のはしっこの草むらにおちて、見えなくなりました。さとちゃんはブランコをおりて、みきちゃんのくつを拾いにいってくれました。みきちゃんもブランコからおりて、片足立ちでさとちゃんが行った草むらを見ていました。すぐに見つかったらしく、さとちゃんがくつをもって走ってきました。そして、みきちゃんにこう言ったのです。

「あそこで猫が死んでる！」

みきちゃんもびっくりして、片方のつまさきをくつの中につっこむとあわててそれを見にいきました。みきちゃんの先にたって走っていったさとちゃんが、ほら、ここ！と大きな声をだしました。みきちゃんもすぐにおいついて、さとちゃんのゆびさす先をのぞきこんでみました。そこにはちいさなちいさなくろい猫がぐにゃりと横たわっていました。２人はじっと見ていましたが

、ふいに猫のひげの先がピクリ、とうごいたのです。

「まだ、生きてる。」

２人は同時に言いました。そして、猫の上にかがみこみました。

「どうしたの？だいじょうぶ？」

猫はなにも言いませんが、また、ひげがピク、ピク、とうごいたのです。みきちゃんは、なにかを思いついて、はじかれたように走りだしました。そして、砂場（すなば）におちていたおかしのトレーに水をいれてもってきました。それを猫のかおの前にもっていくのですが、猫はうごきません。２人が息をひそめて見ていると、猫はかすかに、にぃ、とないたのです。２人はそれからも猫をさすったり、食べそうなものをかおの前にさしだしたり、話しかけたりしました。でも、猫はたまにかぼそい声をだしたり、ひげをうごかしたりするばかりで、反応（はんのう）らしい反応がありません。２人はこまってしまいました。

「どうしよう・・・。」「でも、このままだと死んじゃうよ・・・。」

もう、西陽がかなりつよくなってきています。２人のかげも、猫のかげも長くのびています。２人はそのまま、おたがいの顔をじっと見ながら、だまって立っていました。

…ついに、みきちゃんが言いました。

「つれて帰る。うちで、飼うよ。」

さとちゃんはおどろいて、言いました。

「えー、大丈夫（だいじょうぶ）なの。みきちゃんち、猫飼ってくれるの？」

「んー、わかんないけど、お母ちゃんにたのんでみる。助けたげないと、この子、死んじゃうもん。」

お母さんは泣きじゃくっているみきちゃんのせなかを見ていましたが、ふとなにか思いついたようです。

「みきちゃん、そんなにきつくだいてると、猫さんがくるしいよ。」

みきちゃんのせなかがぴくぴくっ、とうごきました。そうして、猫をすこし体からはなすと、そっとそのかおをのぞきこみました。猫はうす目をあけていますが、みきちゃんのかおを見ているのかいないのか、わからないようなかおつきです。みきちゃんは不安（ふあん）げにそのかおを見ています。猫が心配で、いつのまにか泣くこともわすれてしまったようです。そんなみきちゃんに、ふいにお母さんが声をかけました。

「その猫、ほんとに生きてるの？」

「生きてるよ！」

みきちゃんははっきりと言いました。

「でも、なんとかしなきゃ、なんとかしなきゃ・・・。」

わすれていたなみだが、またあふれてきました。お母さんは、そんなみきちゃんのかおをじっと見ていましたが、ふ、とその目がやさしくなって、ちょっとかしてごらん、と言って猫をだき取（と）りました。みきちゃんは涙をふきながら、お母さんのすることをじっと見ています。

「猫はお母さんが見てるから、みきちゃんはおててとお顔を洗（あら）ってらっしゃい。それがすん

ぎゅうにゅう

だら、れいぞうこから牛乳をだして、おさらにちょっといれてきて。」

みきちゃんは大きくうなずくと、洗面所にはしっていきました。大あわてで手とかおをあらうと、タオルでふくのもそこそこに、だいどころへと走っていきました。

みきちゃんが言われたとおりのものをもって戻ってくると、お母さんは猫をみきちゃんにわたしました。

「コンビニでスポイトを買ってくるわ。」

そういって、お母さんはでていきました。スポイトってなんだろう？とおもいながら、みきちゃんはミルクの入ったおさらを猫の口にちかづけますが、猫はうごきません。しばらくすると、お母さんがかえってきました。お母さんはもどかしそうにビニールぶくろをやぶって、中のスポイトをとりだしました。それでミルクをすいとると、猫の口にミルクをながしこみます。どうやら、ミルクはのどのおくの方までながれていっているようです。みきちゃんはくっつくようにして、そのようすをながめていました。

「ねぇ、やらせて、やらせて。」

見ているとおもしろそうです。みきちゃんはがまんできなくなって、お母さんにさいそくしました。お母さんは、ちいさな声で、だめ、ちょっとまって、といいながら猫の口にミルクをはこびつづけます。

ついに、猫ちゃんのお口がかすかにうごきました！自分からミルクをのむ力がもどってきたようです。わぁ、とみきちゃんは声をだしました。お母さんは、しいっ、と言ってミルクをやりつづけました。前足がかすかにうごきました！はっきり目をあけて、お母さんのかおをじっと見ているようです。どうやらこの子猫も元気がもどってきました。みきちゃんは大はしゃぎ。さっきまで泣いていたのが、まるで夢の中のできごとだったみたいです。

お母さんは、みきちゃんに小さな箱とふるいタオルをもってくるように言いました。みきちゃんはもっと猫を見ていたかったのですが、しぶしぶ言われたものをとりに行きました。みきちゃんが言われたものを手にもってもどってくると、お母さんはいちど、子猫をタオルでくるんで箱にいれました。で、その箱を玄関のくつばこの上に置きました。

「こうしとけば、あったかいしだいじょうぶよ。さ、みきちゃんもおうちにあがりなさい。」

お母さんがそう言ったので、みきちゃんはなんども玄関の方をふりかえりながら、うちに入りました。お母さんはちょっとだけ、猫の入った箱の中をのぞいてから、洗面所へあるいていきました。

お父さんはふぅ～ん、と言ったきり、箱の中のちいさな猫をじっと見ています。ばんごはんのあとで、みきちゃんはお父さんとお母さんに、子猫のことをいっしょうけんめいお話ししました。はじめて見たとき、死んでるんだとおもったこと、このまま捨ててしまったら、こんどこそ死んでしまうにちがいないとおもうこと、なんとかたすけてあげたい、いっしょにくらしたいということ・・・。お父さんはなんというでしょうか？みきちゃんは、しんぱいでしんぱいでしょうがありません。いつもはみきちゃんにとってもやさしいお父さんですが、おこったときにはとっ

てもこわいお父さんになってしまいます。今ばかりは、やさしいお父さんの方でいてほしいのですが。みきちゃんはいのるようなきもちでお父さんをじっと見ています。お父さんは猫をじっと見ています。猫はじっとしています。
そして、たまにかすかな声をだしたり、ちょっとうごいたりするのです。
　ついにお父さんが口をひらきました。
「あした、お母さんといっしょに獣医さんのところへつれていってやりなさい。」

　みきちゃんのかおが、ぱっとかがやきました。

「でも、びょうきがあるんなら、すぐにほけんじょにれんらくすること。びょうきがないんだったら、こんどのきんようびに市役所につれていって、ひきとってもらいなさい。」
「えーーっ。やだよう。」
みきちゃんはとうぜん、大不満です。でも、お父さんはだめだ、と言ったきりむこうを向いてしまいました。お母さんは、みきちゃんにわからないようにため息をつきました。そして、言いました。
「そうしようよ、みきちゃん。市役所だったらじょうずに育ててくれるから。いらない猫とか犬とかみんなひきとってくれるのよ。」
そんなの、大ウソです。市役所につれていかれた犬や猫はみんなころされてしまうのです。お母さんもそれは知っているのですが、みきちゃんがほんとうのことを知ったらどう思うか…。そうかんがえると、ほんとうのことはどうしても言えないのでした。実はお母さんも、やっと元気になりかけた子猫をころしてしまうのは、辛くてたまりません。だけど、そのことを言うわけにもいかないのでした。おとなって、いろいろむずかしいのです。
　みきちゃんは涙ぐんで、うちで飼いたいと言いましたが、お父さんはなにも言わず、むこうを向いたきりでした。
　やさしいお父さん、おこったお父さんなどは知っていますが、こんなお父さんははじめて見ました。今見ているお父さんのせなかは、なんだかとてもさむざむしく見えました。それで、みきちゃんもなにも言えなくなってしまったのです。
　獣医さんに行くとちゅう、だいじょうぶだよね、びょうきじゃないよね、とみきちゃんは何度もくりかえして言いました。お母さんはそのたびに、うん、きっとだいじょうぶよ、とこたえていましたが、その心の中はどんなだったでしょう。びょうきでなくても、けっきょくこの子はころされてしまうのです。でも、そんなことは言えませんから、みきちゃんをだましつづけるしかないのです。スポイトですこしずつミルクをのんだ子猫の姿、はじめてすこし前足をうごかしたときのあのよろこびを思うと、お母さんの心はなんだか真っ黒にぬりつぶされてしまったような気がするのです。

　獣医さんで診てもらうと、子猫はひどくよわってるけれど、びょうきはない、ということで

した。えいようざいをちゅうしゃしてもらうと、子猫はだいぶ元気になったようです。みきちゃんのかおを見て、しきりに声をだします。その姿を見ていると、お母さんはたまらない気持ちになるのでした。二人は子猫をおうちに連れて帰りました。みきちゃんは大はしゃぎでしたが、お母さんはすこしさみしそうでした。

そのばん、お父さんは不きげんでした。会社でおもしろくないことがあったようです。お父さんがさもきげんわるそうにお酒をのんでいると、子猫が来て、お父さんのひざの上にのりました。そうして、お父さんのかおを見上げて、みゃ～う、とないたのです。とたんにお父さんのかおに笑いがひろがりました。笑いながらお父さんはそうかそうかと言って（なにが「そう」なんだか、みきちゃんにはさっぱりわかりませんでしたが）、猫のあたまをなでました。猫はまた、みゅ～ぅとなきました。お父さんはますます上きげんになって、猫にはなしかけながらお酒をのんでいます。

・・・それから一週間。いまだに子猫ちゃんはみきちゃんのおうちで元気にくらしています。みゅー太という名前もつけてもらって、だいじにされています。そうそう、こんどのにちようびには、かぞく三人でホームセンターにみゅー太のための買い物にいく予定です。

よかったね、みきちゃん。・・・？おや、どうやらみきちゃんには少し、不満があるみたいですよ？どうしたんでしょう…。あれあれ、どうやらみきちゃん、さいきんお父さんがみゅー太ばっかりかわいがって、あんまりみきちゃんにかまってくれないのが気にいらないみたいですよ？

とりあえずは、おめでとう！末永く、お幸せに！ね、みきちゃん。

福音は誰がために降り来たる

少し曇った空の下、引越屋の小さなトラックが一台、埃を巻き上げて走ってきた。今にもひしゃげてしまいそうな文化住宅はそれだけでガタピシと音を立て、住人のうち、部屋にいた何人かは窓から不機嫌そうな顔をのぞかせた。その一様に老いた顔々は、もう何年、何十年も笑みを浮かべたことがないのだった。

その文化住宅の入り口あたりでトラックは止まり、運転席側から中年の男が、続いて、助手席側から干して固めたような老婆が降りてきた。プラスチック製の衣装ケース二つ、十四型テレビ、一人用の冷蔵庫、こたつ、いくつかの段ボール箱を二人は、これから老婆が独りで住むことになる部屋に運び込んだ。来たとき同様、ひどい音をたててトラックが走り去ると、老婆は両隣の部屋にまず挨拶に行った。どちらの部屋もドアを半開きにして、探るような目で話を聞いた。さも迷惑そうだったが、老婆は気にしなかった。実際のところ、彼女は清々していたのだった。

この数年、長男と次男、長女の家を行ったり来たりしていた。長男の家では、中学生になったばかりの孫が「おばあちゃん臭(くさ)いから嫌い」と言っているのを壁越しに聞いたし、次男の家では自分の衣類だけ、わざわざ別に洗われているのに気がついた。どこに行っても小さくなって、家人の顔色をうかがって暮らしてきた。年をとって、連れ合いにも先立たれて、自分一人では生きられないと思って、痛みを痛みじゃないと、自分に言い聞かせてきた。だけど、ある時、嘘でいくら塗り固めても、お互いにもう耐えられないということを悟ったので、一人で暮らすことにしたのだった。最後にいたのは長男の家だった。最初、長男夫婦は彼女が出ていくことに反対していたが、内心は出ていって欲しかったようで、十数分の押し問答の果てには老婆は自分の考えを押し通すことができた。

もっと早くからこうしていればよかった、と彼女は思った。彼女の住まいがあるあたりは、軒の低い町工場がひしめきあっているすぐ近くで、裏にはどぶ川が流れ、近所の小学校の屋上から見れば、そこはまるで時代の底みたいに見えた。それでも住めば都、と彼女は胸を張った。

ただ、住人の話題は愚痴か不平に限られていることだけは、慣れることができなかった。彼らが口を開けば一様に不満が飛び出した。家族・親戚のこと、近くの工場から出る悪臭、騒音のこと、近所のスーパーで何を買ったら他の店でもっと安く売っていた、洗濯物を干して出かけたら雨が降った、ありとあらゆる種類の愚痴が彼らの口からは止めどなく流れ出た。それらは、同意すれば際限なく繰り返され、聞き流せばいつか怒号に変わった。まるでたちの悪い流行病(はやりやまい)みたいだった。

しかし、それを除けば、部屋が湿っぽいのにも、上の階の足音がひどいのにも、暗く長い廊下が病院を連想させることにも慣れることができた。病院を怖いと思ったことはなかった。人は病院からやって来て、病院へと還っていくのだ。別に、何処かに帰り着きたいとも思わなかったし

、何処かに行きたいと思うあてもなかった。
楽しくうかれるような毎日でもなかったが、かと言って、辛気くさいばかりの毎日でもなかった。老婆を訪ねる者は誰もなかったが、やがて近所の野良猫がしばしば彼女の客になった。窓縁にやってくる猫に、煮干しを少しやったりする（もちろん、彼女はストラルバイト結晶だのという言葉は知らない。ただ、猫ならば魚が好きだろうという程度の考えしかなかったが、食べやすいようにくだいてやったり、目やにがついていたら、自分の唾をつけて、こすり取ってやったりした。）のが、老婆にとっても日々の楽しみになっていた。
猫たちは汚れていて、特にかわいい風でもなかったが、それでもやわらかな陽光の下で毛繕いする姿などを見ていると心が少しはなごむような気もした。気がするだけかもしれなかった。
そのうち、猫の方でも入れ替わりがあったりして、訪ねてくるのは３匹にほぼ落ち着いていた。クロ、シロ、トラと名前をつけたが、実際には皆トラ猫で、トラ以外の２匹はそれぞれ、黒い毛が多く混じっているのと、腹が白いのということだった。しょせん、老女にはタマか、毛色にちなんだ名前しか思いつかなかった。まさか、トラ、トラ、トラじゃ真珠湾攻撃だものねぇ、と言って一人でころころと笑ったものだ。そのとき、猫（ちょうどシロが来ていた）はにゃあ、とも言わずに毛繕いをしていた。掌におさまりそうな小さな幸せ、でも後から思えばそれが黄金期だったのだ。
或る日、窓の外に猫の影を見つけて窓を開けようとしたら水をぶちまける音がして、すぐに影は消えていった。
水をまいたのが、老婆が猫に餌をやっていると、憎々しげに見ていた隣の中年女性だろうことは容易に想像がついた。ただ、これという証拠もなく、それに時々、あの女を訪ねてくる、いつも酒臭くて妙に機械的な動きをするおっさんのことを考えると何も言えなかった。あの男が女の連れ合いなのに違いなかった。しかし、いつも何かを疑っているような細い目と、不満そうに突き出した下唇、土気色の顔が共通しているので、兄弟か親戚関係なのかもしれなかった。いずれにせよ、無性に恐ろしく、不安を掻き立てられる存在であったことには間違いない。

その日はいつもより少しだけ早起きした。ゴミを出さなくてはならない日だった。ゴミ袋を持って、所定の場所に行くと、数人、人だかりができていた。何事かと思って覗いてみると、無惨に引きちぎられたゴミ袋が２つ。
一人が野良猫のせいだと騒ぎ立てていた。しかし、ほぼ真っ二つに切り裂かれた袋を見ていると、ある疑問がどうしても頭をもたげてきて、老婆はつい、口を出してしまった。
「猫なんて小さなもんが、そんなに派手に切り裂けるもんかね？それに、猫が好きそうな生ゴミが捨ててあるようでもないしね。」
確かに、ごみの中には猫が好んで食べそうなものはない。何人かが、なるほどと感心した様子で同調したが、猫のせいだと騒いでいた女は、それでも言い募った。
「そりゃ、魚の骨とかあったのは、全部、野良猫どもが食っちまったんだろうよ。」
老婆はさすがに吹き出した。

「どんなに大食漢の猫だい。それに、人間が捨てる魚の骨なんかは猫も食べないんだよ。表面を舐めるだけで、さ。」

集まっていた人たちは、もう興味を失って、そろそろ帰り始めていたが、まだ残っていた数人が笑い、それもそうだねぇ、とかなんとか言いながら帰路についた。誰も、自分の出したゴミでなければ、特に関わろうとする理由もないのだった。

ただ、野良猫のせいだと騒ぎ立てていた女だけは、老婆を睨みつけ、腹立たしげに大股で立ち去った。老婆はそれには気づかず、自分の持ってきたゴミ袋を置いて帰った。何となくすっきりした気分だった。その代わり、猫たちを見かけなくなった。彼女はあちこち猫を探して歩いたが、どこにも彼らの小さな姿は見つからなかった。猫嫌いの人もこの近所には珍しくなかったが、まさか、何か危害を加えたのだろうか…？不吉な想像が頭をよぎったが、老婆は考えないようにした。考えることで、それが現実になってしまうような、そんな不合理な考えにしがみついた。

猫たちを見かけなくなってから、もう一週間が過ぎようとしている。

老婆は気が気でなかったが、野良猫のことを尋ねるような相手もいなかった。むしろ、余計なことを言えば、不利になる一方なのではないか、と思えた。毎日、あるいは時々顔をあわせる近所の人の、誰がどんな考えでいるのか、誰が信用に足るのか、とあらためて考えたが、まったく分からなかった。考えてみれば、周りの愚痴や不満を聞くことはあったが、誰かに何かを話したことはほとんどなかった。自分はここに住んでいると言えるのだろうか？ここで生きていると言えるのだろうか？そう考えた時、老婆の心に、潰れるようなさみしさが、さぁっ、と流れ込んだ。ずいぶんと前に、テレビのドラマか何かで見たシーンを思い出した。幽霊になった人物がいくら手を伸ばしても目の前の物を通り抜けてしまって、触れることができない、驚きのうちに、自らの死を認識する、そんなシーンだ。

途端に涙が溢れてきた。長年連れ添った夫の葬儀が終わった後、自分をどうするのか、子供たちが深刻な顔で話し合っていた（喧嘩していた）のを、眠ったふりをして聞いていたときの、情けない気持を思い出した。いずれも、贅沢はさせてやれなかったにしても、外で恥ずかしい思いをしないようにと、できる限りのことはして、育ててきたつもりだった。小さいときは皆、優しかったし、かわいいところのある子たちだった。その子供たちが寄り合って、自分を厄介者扱いし、押しつけあい、いがみあい、罵りあっていた。あれからずっと、忘れるように、見ないようにしてきたけれど、全部、実際にあったことだった。

衝動的に、老婆は死を思った。もう生きているのはいやだと思った。死ぬのは嫌に違いないが、このまま影のように生きているよりも、はっきり白黒つけた方がいいに決まってる、そんな風に思われた。

ほとんど反射的に、ガスの元栓を開いた。力任せにホースを引き抜いた。それから思いついて、整理ダンスの引き出しからガムテープを出して、立て付けの悪い窓に目張りをした。

体を丸めて、目をつむり、耳を塞いだ。もう何も見ない、もう何も聞かない。そう思うと、そ

れがとても正しいことだと思われた。少し、眠くなってきた…。

そのとき、何かがドアに当たった。かすかに、外からドアをこするような音がしてきたが、老婆は気づかない。そのうち、何かがガラス窓に当たるような音がした。そして、ぎゃああ、と大きな声が…。老婆は飛び起きた。聞いたことがある、この声！そして、窓に小さな影が映っているのが見えた。それは、どうやら、なんとか部屋の中に入ろうとしているらしい。苦しかったが、老婆は這いずるようにして、窓を開けに行った。立て付けの悪い窓をぎしぎしと開けると、トラ猫が飛び込んできた。黒猫と、３匹の、手のひらサイズの猫が続いた。老婆は慌てて、ガスの栓を閉めた。わぁわぁ、ぎゃあぎゃあ言いながら、猫たちが近づいてきた。お腹をすかせているようだった。老婆は冷蔵庫からかまぼこを出して、ちぎってやった。猫たちはそれをむさぼるように食べた。

あんたたち、相当、お腹空かしてたんだねぇ、と老婆は言いながら、最初に飛び込んできたトラ猫の頭を軽くなでた。猫は食べながら、うにゃ、と小さな声をだした。

「あんた、クロだね。」

老婆がわざわざ声にだして確かめたのは、猫のしっぽが前の半分くらいの長さしかなかったのと、その代わりに、前にはなかった傷痕があったからだった。

「お嫁さん連れて、帰ってきたんだねぇ。」

老婆の目には、自然と涙があふれた。先の涙とはまったく違う涙だった。

クロが、どこで、誰に何をされたのかはわからない、でもこの子は、自分を頼って、帰ってきてくれた。ここにくれば何か食べられる、なんとかなると信じて、来たに違いない。自分の家族と自分自身の命を守るために、何かから逃げて、必死にここを目指したに違いない。そう思うと、あとからあとから、涙はとめどなく流れた。

翌日、老婆は長男の家に電話をかけた。怒鳴りつけんばかりに長男夫婦を呼びつけて、ペット可マンションに引っ越すための資金を出すように説得した。嫁が文句を言ったが、頑として聞かなかったら、最後には、金を出すことにしぶしぶ同意して、長男夫婦は帰っていった。おそらく、これから兄弟を集めて、金を集めようとするのだろう。あのときと同じように、厄介者になった親を押しつけあうのだろう、自分たちの今は、最初から最初から自分の力だけで作り上げてきたように思っているのだろう、と考えた。勝手にしろ、と思った。好きなように思えばいい、自分は自分で生きていく。この子らと一緒に生きていく。弱い者同士、寄り添って生きていく。ただし、いつまでも弱いままではない。

あんたらがするように、自分の権利は主張する。少なくとも、大人になるまであんたらを育ててきたのだから。した分は返してもらう、それだけだ。それだけの人間関係だ。それで結構。

老婆は、自分が風になったような気分がした。自由だが寂しく、無力だが傷つかない、風になったような気分がした。来月には引越できるだろう。そして、少しは強くなるだろう。猫の頭をなでながら、生きるということを思った。自分は、強く、むごくなるだろう。そして、そう生きていくのだろう。あと何年かは分からないけれど、強く、生きていくだろう。

あとがき

　初めて、電子書籍なるものをつくってみました。こういう読み物は、ジャンルとしてどういうカテゴリになるのかもよく分からないまま、書いてみましたが、読んでくださった方が、何か、心に引っかかるものを感じてくだされば、幸いです。

　そして、できることなら、今後ともよろしくお願いします。

あすか　こうじ